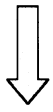


## 唇顎口蓋裂児の嚙下パターンについて

新潟大学歯学部 花田 晃治

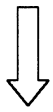
唇顎口蓋裂患者の歯列弓の形態及び顎顔面頭蓋の成長に対する軟組織の影響は従来より論議されているところであるが、特に舌の関与が重要視される。これまで舌運動の解析には主としてX線学的計測が行われてきた。しかし側方及び前後方からの撮影では二次的にしか見られず、又X線被曝の問題もあり新しい解析法の必要性が生じた。そこで今回、言語治療の分野で利用されているエレクトロパラトグラフィを用いて嚙下運動時の舌の口腔内組織への接触様式を検討した。被験者は個性正常咬合を有する成人男子5名で、リオン社製エレクトロパラトグラフィを用い特別に上下顎プレートを製作(上下顎合わせて63個の電極を3次的に包埋したもの)し、水2ml嚙下時、唾液嚙下時、不随意唾液嚙下時、安静時について舌接触様式を32コマ/secで経時的に記録した。特製の頭部固定装置により頭部の動揺を防ぎ、一定の間隔をおき2度記録採取した。その結果、上記4つの運動時に個体間変動のある接触様式が観察された。すなわち個性正常咬合者を対象として選んでるので前歯の配列、歯軸傾斜などには個体間には差がないが、口蓋の深さ、口蓋前方部の傾斜度、下顎舌側部の形態などには個体間に差がある。これらの部分と舌尖との接触様式、たとえば接触部位の有無、接触時間の遅速、接触持続時間の長短などに個々に特有なパターンが存在することがわかった。

ついで乳歯列を有する唇顎口蓋裂児を両側性と片側性に分け、それぞれについて口蓋変形部と舌の接触様式の状態との関係を調べた。更に狭窄している口蓋部と側方拡大によって広くなった口蓋部と舌の接触様式の違いをそれぞれの症例について調べた。その結果、舌は変形している口蓋の凹凸を補償しているような接触様式をとること、側方拡大後は接触時が早まる上に、接触部位が多くなることがわかった。全体を通していえることは、口蓋裂の方が舌尖と上顎口蓋部との接触が弱かったり、接触しないで嚙下運動を行なっている者が存在することである。今後は舌圧の経時変化、舌の運動と口腔周囲筋との関係などを研究することにより口蓋裂児の嚙下パターンについて解明する予定である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂患者の歯列弓の形態及び顎顔面頭蓋の成長に対する軟組織の影響は従来より論議されているところであるが、特に舌の関与が重要視される。これまで舌運動の解析には主としてX線学的計測が行なわれてきた。しかし側方及び前後方からの撮影では二次元的にしか見られず、又X線被爆の問題もあり新しい解析法の必要性が生じた。そこで今回、言語治療の分野で利用されているエレクトロパラトグラフィーを用いて嚥下運動時の舌の口腔内組織への接触様式を検討した。被験者は個性正常咬合を有する成人男子5名で、リオン社製エレクトロパラトグラフィーを用い特別に上下顎プレートを製作(上下顎合わせて63個の電極を3次的に包埋したもの)し、水2ml嚥下時、唾液嚥下時、不随意唾液嚥下時、安静時について舌接触様式を32コマ/seで経時的に記録した。特製の頭部固定装置により頭部の動揺を防ぎ、一定の間隔をおき2度記録採取した。その結果、上記4つの運動時に個体間変動のある接触様式が観察された。すなわち個性正常咬合者を対象として選んであるので前歯の配列、歯軸傾斜などには個体間には差がないが、口蓋の深さ、口蓋前方部の傾斜度、下顎舌側部の形態などには個体間に差がある。これらの部分と舌尖との接触様式、たとえば接触部位の有無、接触時間の遅速、接触持続時間の長短などに個々に特有なパターンが存在することがわかった。